

⊗特集 今を映すもう一つの歴史記述…偽史・オカルト・歴史実践 ⊗

序

小澤 実

本特集は、「偽史（・偽書・偽文書）」「オカルト」「歴史実践」という一見関係なさそうに見える分野の近著を六人の評者が論評し、その底流に見える近年の歴史意識と「歴史をかく」（松沢裕作）という行為の一端を明らかにする試みである。¹⁾

筆者が日本学研究所のシンポジウムとして企画した「近代日本の偽史言説」が開催された二〇一五年の段階では、偽史やオカルトと言ったものはまだ、筆者を含む一部好事家の趣味的対象ではあっても、アカデミズムの対象としても一般メディアで扱う内容としても、十分に認知されたものとは言えなかった。²⁾同シンポジウムに基づく『近代日本の偽史言説』が刊行された二〇一七年が刊行された時点で、事情はさほど変わってなかったかもしれない。³⁾例えば史学アカデミズムの権化のように揶揄されがちな『史学雑

誌』の回顧と展望を検索にかけたところで、偽史やオカルトに関するなんらかの記述がヒットすることはないだろう。

もちろん、日本に限ったとしても、原田実・長山靖生・藤原明らによる偽史の概観⁴⁾、斎藤光政による『東日流外三郡誌』をめぐる騒動のルポ、⁵⁾一柳廣孝らによる近現代オカルト事象の分析、⁶⁾アカデミアと一般との間の歴史意識の乖離をデータで示した、佐藤卓己らによるメディア論的受容研究、⁷⁾といった今回の特集を考えるにあたっての先駆的著作はあった。しかしそれは、今振り返ってみれば、というレトロスペクティブな視線と思考を伴って初めて位置できる状況であるかもしれない。それぞれの研究は、それぞれ別々の文脈で世に問われた孤立的な成果であった。場合によっては、それらがあるという事実それ自体が、アカデミズムには共有材として認識されていなかったと見るべき

かもしれない。筆者も含めて、『ムー』のようなキワモノもしくは分析したとしても時代の諸相が見えないトリヴィアルな事例としてぞんざいに扱っていたというのが当時の状況であつただろうか。

『近代日本の偽史言説』が刊行された二〇一七年は、世界にとって大きな転換点となつた。つまり、ドナルド・トランプが同年一月二〇日に第四五代アメリカ合衆国大統領に就任したのである。ここで私は言いたいのは、彼の在任中の政策の功罪や国際政治体制に与えた影響ということではない。「アメリカを再び偉大にする」とのキャッチフレーズとともに自国中心主義を全面に出す彼が、スーパーパワーであるアメリカ合衆国のトップに就いたことにより、そして「TwitterやフェイスブックというSNSを全世界の政治家の誰よりも「巧みに」使うことにより、それまで表に出てこなかった「オルタナティブな歴史言説」がいとも容易く活性化するように思える点である。詳細な経過とメカニズムについてはいずれメディア論の専門家が分析してくれるだろうが、例えば戦争責任などをなかつたことにする、もしくは軽減する「右派言説」に基づく「歴史修正主義」と一括されるヒストリオグラフィーが活性化し、陰謀論・フェイクニュース・カウンターヒストリーもまた「普

通の人」の生活の一部に「市民権」を得たかのようになつた。

もちろんそれらは突然出てきたものではない。歴史を国民統合や合意形成の道具として利用する政治体や共同体に注目すれば、長年にわたつて世界のいづれにおいても応分に語られていたものである。しかしそれらが、大手を振つてネットやメディアを歩き回るようになり、瞬く間に明示的な賛同者を獲得するようになったというのは遠い過去の話ではない。もちろんそれに反発するかたちで、「知的退行」や「反知性主義」と叫ぶ知的エリートらによる「リベラル言説」や「左派言説」も活性化した。しかし彼らが散々馬鹿にし抑え込んできたと思ひ込んでいた「オルタナティブな歴史言説」がこうもたやすく世界を徘徊する様は、脅威であり驚異であつただろう。その功罪はここでは述べないとして、ある意味リベラルエリートらが「啓蒙的に」構築し普及させようと躍起になつてきた「正統」言説に対するオルタナティブな言説の対抗と相互の角逐による「言説空間」の活性化は、一つの歴史事象として注目すべきなのではないか、というのが私の今思うところである。

歴史的な観点から言うと、こうした流れの転換点にあるのは、歴史記述に対するオーディエンスへの関心があることは間違いない。読書論や受容史研究でオーディエンス

に対する関心は随分前からあるではないか、という指摘もできようが、従来の研究は、どちらかと言えば、歴史記述にせよ文学にせよ、無意識のうちに「正統」とされているものを選択的に取り上げてその読者を論じていた、と言えば言い過ぎだろうか。一般的な史学史・文学史・思想史などからこぼれ落ちる「例外」「二流」「キワモノ」はさしあたりそうしたものとして認識され、まともな学問の対象にするべきではない、少なくともそのようなものを扱ったとしても学界で評価される研究にはなるまい、と言う空気がなかったと言えば嘘になる。冒頭に述べたとおり、日本の学界でも、評価と議論の対象となるテーマは選択的であったのである。歴史実践やプラクティカル・パストという言葉が学界で共有されつつある現状は、オーディエンスから見た「歴史をかく」という行為のあり方と意義をより深めてくれることになるだろう。伝統ある『ユリイカ』の令和二年一二月号で「偽書の世界…ディオニシウス文書、ヴオイニツチ写本から神代文字、椿井文書まで」などという特集が組まれたのは、まさにそうした関心を出版界が敏感にすくいとったことの証左であるかもしれない。

今回の特集では、日本において右記の一般の関心・学界・出版状況を反映しているように見える一連の書籍を取り上げる。それぞれの分野における専門家による連作レビュー

という形式を取り、今現在における「オルタナティブな歴史記述」に対する関心のあり方を記録としてとどめるとともに、こうした研究の動きに対して歴史家としてどのように受け止めるべきかということを考えてみたい。

報告一は、馬部隆弘『椿井文書―日本最大級の偽文書』（中公新書、二〇二〇年）を対象とした「偽書もまた「史料」なりき。―馬部隆弘『椿井文書』に寄せて―」である。一八世紀畿内の偽文書メーカーであった椿井正隆の生涯、その偽文書の特徴、後世における影響を扱った本書は、長年椿井文書に対峙してきた著者馬部の軽妙な筆致もあってベストセラーとなった。メディアなどでもすでに多数の書評や紹介が寄せられており、現在の偽史・偽書ブームの中心にある本でもある。本特集では、日韓の世相とその変遷に詳しい室井康成が、現代の世相に敏感である民俗学者としての視点から読み解く。

報告二は、長年偽書研究を進めてきた藤原明による一連の著作（『日本の偽書』（河出文庫、二〇一九年）、『偽書』『東日流外三郡誌』の亡霊…荒吐の呪縛』（河出書房新社、二〇一九年）、『幻影の偽書』『竹内文献』と竹内巨磨…超国家主義の妖怪』（河出書房、二〇二〇年）を対象とした「近代現代日本における偽作史書とその受容を考えるために―

藤原明氏の近業に接して」である。記紀の近世国学解釈に淵源をもつであろう近代日本の偽書の社会における受容を扱った一連の著作は、今後、近代偽書研究の礎としての役割も果たすことになるだろう。書評者は、アカデミシャンとしては例外的に長年にわたって偽史を論じ、藤原の著作でも名前のあがる教育史家の長谷川亮一がつとめる。

報告三は、現在偽史研究の第一人者である原田実による「江戸しぐさ」を扱った一連の新書（『江戸しぐさの正体』（星海社新書、二〇一四年）、『江戸しぐさの終焉』（星海社新書、二〇一六年）、『オカルト化する日本の教育…江戸しぐさと親学にひそむナショナリズム』（ちくま新書、二〇一八年）を対象とした「江戸しぐさ」の現在と未来―原田実氏著作を読んで―」である。この三書は、文科省をはじめとする行政の内部にまで食い込んでいた「江戸しぐさ」という偽史とその社会的影響を、いずれも原田自身のリサーチによって明らかにした成果である。本特集では、帝国日本の植民地教育行政を専門とする樋浦郷子が、新自由主義下における文科省行政という観点から分析する。

報告四は、オーウェン・デイヴィス（江口之隆訳）『スーパーナチュラル・ウォー…第一次世界大戦と驚異のオカルト・魔術・民間信仰』（ヒカルランド、二〇二〇年）と栗田英彦他編『近現代日本の民間精神療法…不可視なエネ

ルギーの諸相』（国書刊行会、二〇一九年）という、二〇世紀前半のイギリスと日本で起こった現象を扱った二つの研究書を軸とした「近現代における超自然信仰と不安のマーケット」である。ユーラシアの東西の端に位置し、第二次世界大戦に至っては対極的な歩みを見せたと思われる日本とイギリスにおける「オカルト現象」が、「不安のマーケット」という観点より二〇世紀のどのような歴史的側面を明らかにできるのかを説く。近現代の精神医学史を専門とする高林陽展が担当する。

報告五は、ミヒヤエル・H・カーター（森貴文監訳）『S先史遺産研究所アーネンエルベ…ナチスのアーリア帝国構想と狂気の学術』（ヒカルランド、二〇二〇年）を対象とする「オカルト・学知・第三帝国…カーター『S先史遺産研究所アーネンエルベ』の周辺」である。ナチ体制化における学問のあり方をめぐる研究は、ナチズム研究産業では一つの確立した分野であり、その結果として一定分量日本語でも読むことができる。本書は、そうしたナチズムにおける学問研究でも最重要文献の一つであり、そのナチズムのイデオロギーと実践の中核を担ったアーネンエルベに関する基本書である。本書を取り巻く問題系という観点から、北欧中世史と近代学問史を専門とする小澤が紹介する。

報告六は、渡部竜也『歴史総合パートナーズ 9 Doing History：歴史で私たちは何ができるか?』（清水書院、二〇一九年）と菅豊・北條勝貴編『パブリック・ヒストリー入門 開かれた歴史学への挑戦』（勉誠出版、二〇一九年）という、歴史実践の入門として話題となった二書を対象とする「歴史学再生のために―歴史実践から考える」である。一九世紀ドイツの制度的枠組みと国家意思の中で誕生した近代歴史学が標榜する「歴史的過去（ヒストリカル・パスト）」が提出する「客観性」の問題は論じられて久しく、それへの反省もあって、主体の歴史意識や歴史認識から立ち上がる「実践的過去（プラクティカル・パスト）」という視点が盛んに論じられるようになった。これからの歴史学にとって何が必要であるのかという大きな問題意識も含めて、歴史学の現代的意義とその機能を意識するアメリカ史家の松原宏之が切り込む。

報告一から三は「偽史（・偽書・偽文書）」、四と五は「オカルト」、六は「歴史実践」を対象とする。一見するとこれらのトピックは別個のもののように思われるが、先ほど述べたように、筆者の見立てによれば、歴史家ギルドを一旦離れて広範囲のオーディエンスの側に立って見たならば、昨今の「社会」が求めている「オルタナティブな歴史記述」が映し出されているようにも思われる。今や誰もが

史苑（第八一卷第二号）

歴史を意識し、歴史を口にし、歴史を実践するが、それは必ずしも歴史学者が史料から抽出した事実に基づく「正統的な」ストーリーと合致するとは限らない。むしろそうした教科書記述に見えるような「正統的な」ストーリーは、選択可能な数ある歴史のストーリーのなかの一つとして消費されている、というのが現状かもしれない。今回の特集は、歴史学の成果としての歴史書の批評でありつつも、それら個々の歴史書の執筆意図を超えたところに見える「今を映すもう一つの歴史記述」を、大げさな言い方をすれば、文化人類学者や民俗学者の視線で観察し記録する特集でもある。

とはいえ、まずは力のこもったそれぞれの報告を読む旅に出かけよう。

註

- (1) 松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィイ』（山川出版社、二〇一五年）では、ルートヴィヒ・リースを近代歴史学の祖とする一般的な公式見解を取らず、幕末以来の「歴史をかく」という行為に焦点をあてて、近代日本における歴史記述の実践と意味を明らかにしている。
- (2) 当日の状況は、小澤実「二〇一五年度公開シンポジウム 近代日本の偽史言説 その生成・機能・受容」『立教大学日本学研究所年報』一四・二五（二〇一六年）、三一―一〇頁。
- (3) 小澤実編『近代日本の偽史言説：歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー』（勉誠出版、二〇一七年）。オーディエンスの反応はSNS上で確認できる。「シンポジウム」近代日本の偽史言説 その生成・機能・受容「まとめ」(<https://togetter.com/li/897315>)。
- (4) 彼らによる研究動向は、小澤実「偽史言説研究の射程」『近代日本の偽史言説』、三一―一七頁にまとめている。原田は、『偽書が揺るがせた日本史』（山川出版社、二〇二〇年）を刊行した。偽書というトピックを扱った一般書を、歴史教科書の最大手であり日本を代表する歴史系学術出版社でもある山川出版社が版元を引き受けたという点に注目すべきである。
- (5) 斎藤光政『戦後最大の偽書事件『東日流外三郡誌』（集英社文庫、二〇一九年）。原著は、『偽書「東日流外三郡誌」事件』として二〇〇六年に新人物往来社から刊行された。
- (6) 一柳廣孝『「くくりさん」と「千里眼」…日本近代と心霊学』（青弓社、二〇二一年）の原著は、一九九四年に講談社選書メチエの一冊として刊行された。また貴重な共同研究とし
- て一柳廣孝編『オカルトの帝国―一九七〇年代の日本を読む』（青弓社、二〇〇六年）。様々な媒体に掲載された文章を集めた論集『怪異の表象空間…メディア・オカルト・サブカルチャー』（国書刊行会、二〇二〇年）の副題「メディア・オカルト・サブカルチャー」は、今回の特集にとっても示唆的である。
- (7) 佐藤卓己編著『ヒトラーの呪縛…日本ナチカル研究序説』（上下、中公文庫、二〇一五年）。原著は二〇〇〇年に飛鳥新社から刊行されている。二〇〇〇年という時点でこの先駆的メディア研究がいわゆる学術出版社から刊行されていたかどうかは多分に疑わしい。なお佐藤は、一九九四年に、ゲオルゲ・モッセ『大衆の国民化…ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』（柏書房）を翻訳・刊行している。最近ちくま学芸文庫で復刊されたこの著作が劈頭を飾る「パルケマイア叢書」という叢書は、誤解を恐れずに言えば、おそらく当時の学会では忌避されていた右派的言説やナショナルステイックな運動をとりわけメディア論的なアプローチで正面から捉えた稀有な叢書であった。
- (8) とりわけアメリカにおける陰謀論やフェイクヒストリーのあり方は、いくつかの本で紹介されている。ジェシー・ウオーカー（鍛原多恵子訳）『パラノイア合衆国…陰謀論で読み解く《アメリカ史》』（河出書房新社、二〇一五年）。マイケル・バークン（林和彦訳）『現代アメリカの陰謀論―黙示録・秘密結社・ユダヤ人・異星人』（三交社、二〇〇四年）。
- (9) 早い段階で現代イスラム世界のゾッキンに見える宗教意識を論じたのは、池内恵『現代アラブの社会思想…終末論とイスラーム主義』（講談社現代新書、二〇〇二年）。

(10) 冒頭には私と馬部隆弘による「文書をめぐる冒険―偽文書・偽文書・公文書」という対談が掲載されている。ただし今回の『史苑』の特集と『ユリイカ』の特集は全く別個に企画された内容である。

(本学文学部教授)